

# 光源氏と願望の終助詞

木谷眞理子

## 一 「しがな」と「ばや」の使い分け

「しが(な)」と「ばや」は、よく似た言葉である。どちらも平安時代の、願望を表す終助詞で、動詞または一部の助動詞につくが上接語は重なるものも多い。しかし少なくとも『源氏物語』においては、「しが(な)」と「ばや」は使い分けられているように思われる。例えば次のような事実がある。

『源氏物語』について、心内語の末尾にある「ばや」・「しが(な)」が、どのようなことばで承けられているかを調べてみると、当然のことながら、「ばや」・「しが(な)」のどちらについても、「と思ふ」・「と思す」などが多い。しかし、それぞれに特徴的な承け方も見出される。「ばや」に特徴的な承け方は、次の波線部のようなものである。

01 (源氏二八) かの入(＝藤壺)の御かはりに、(若紫ヲ)明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

(若紫①二〇九頁)

02 (女三ノ宮八源氏ガ)さのみこそは思し隔つることもまさらぬ

と恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。

(柏木④三〇一頁)

03 中将の君(＝薫)、なかなか親王の思ひすましたまへらん御心ばへを対面して見たてまつらばやと思ふ心を深くなりぬる。

(橋姫⑤一二九―一三〇頁)

04 (薫八弁ノ尼カラ浮舟ノコトヲ)くはしく聞きあきらめたまひて、さらば、まことにてもあらんかし、見ばやと思ふ心出で来ぬ。

(宿木⑤四六一頁)

これらの用例では、「――ばやと思ふ心ガ願望者ニ(オイテ)つきぬ・深くなりぬる・出で来ぬ」という形が共通している。「――ばやと思ふ心」が主語の位置に立っており、願望者は受動的なのである。

一方「――しがな」に特徴的な承け方は、次の波線部のようなものである。

05 (源氏ハ)かやうのついでにも、かの五節を思し忘れず、また見てしがなと心にかけてたまへれど

(澄標②二九九頁)

06 (玉鬘ハ)実の親にさも知られたてまつりにしがなと人知れ

ぬ心にかけたまへれど

(胡蝶③一七五頁)

07 (大君ハ) 我も人も見おとさず、心違はでやみにしがな、と思ふ心づかひ深くしたまへり。

(総角⑤二八八頁)

これらの用例では、「願望者ハ——しがなと心にかく・心ヲつかふ」という形が共通している。「——しがな」はここでは、願望者が意志的に心をつかい心にかけて対処すべき課題なのである。

01～04のような承け方は、「ばや」にのみ見られ「しがな」には見られないし、また05～07のような承け方は、「しがな」にのみ見られ「ばや」には見られない、という事実をまずは指摘しておこう。あるいは次のような事実もある。光源氏の会話・心内語における「ばや」・「がな」の用例を見ていくと、二つの用例群が目を引く。

一つめは、「桐壺」～「若紫」巻という物語の初発部に集中して現れる「——ばや」の用例群である。

A 若き御心地に(藤壺ヲ)いとあはれと思ひきこえたまひて、常に参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ。

(桐壺①四三頁)

B (空蟬ガ軒端狝ト)さて向かひるたらむを見ばやと思ひて、やをら歩み出でて簾のはさまに入りたまひぬ。(空蟬①一九頁)

C (夕顔ノ家ノ住人ニツイテ、惟光ノ調査報告ヲ聞キ)君うち笑みたまひて、知らばやと思ほしたり。

(夕顔①一四三頁)

D (北山ノ少女ヲ見テ)さて、いとうつくしかりつる見かな、何人ならむ、かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

(若紫①二〇九頁)

E (北山ノ少女ガ兵部卿宮ノ子デアルト知り)うち語らひて心の

ままに教へ生ほし立てて見ばやと思す。

(若紫①二一三頁)

いずれの「——ばや」も、光源氏の心内語のなかに出てきており、特定の女君と近しく関わることを望む表現となっている。

二つめは、光源氏が須磨・明石から帰京した後に現れる「——がな」の用例群である。

F かの五節を思し忘れず、また見てしがなと心にかけてたまへれど、いと難きことにて、え紛れたまはず。……心やすき殿造りしては、かやうの人集へても……と思す。

(薄雲②二九九頁)

G (秋好ニツイテ)この人知れず思ふ方のまじらひをせさせたまつらむに、人に劣りたまふまじかめり、いかでさやかに御容貌を見てしがな、と思すも、うちとくべき御親心にはあらずやありけむ。

(薄標②三二七頁)

H (秋好ニ)「年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空のけしきにつけても、心のゆくこともしはべりにしがな。……狭き垣根の内なりとも、そのをりの心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたり、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覽せさせむと思ひたまふるを、いづ方にか御心寄せはべるべからむ」と聞こえたまふに

(薄雲②四六一～四六二頁)

I 女君(＝紫ノ上)に、「……時々につけたる木草の花に寄せても、御心とまるばかりの遊びなどしてしがな」と、「公おほやけたくし私ひかくしの営みしげ身こそふさはしからね、いかで思ふこととしてしが

な」……など語らひきこえたまふ。(薄雲②四六四〜四六五頁)

J (紫ノ上ニ、玉鬘ニツイテ)「かかるものありと、いかで人に知らせて、兵部卿宮などの、この籬まがの内好ましうしたまふ心乱りにしがな。すき者どももの、いとうるはしだちてのみこのわたりに見ゆるも、かかるものくさはひのなきほどなり。いたうもてなしてしがな」(玉鬘③一三一頁)

K「人々(〓六条院ノ女君タチ)のこなた(〓春ノ町)に集ひたまへるついでに、いかで物の音試みてしがな。私の後宴すべし」とのたまひて(初音③一六〇頁)

光源氏は、五節(F)、秋好(G・H)、紫の上(I)、玉鬘(J)、そして六条院に住む女君たち(K)、への関心を滲ませている。しかし、「いと難きことにて、え紛れたまはず」(F)というように、さまざまな束縛となる現実が顧みられてもくる結果、女君たちとの関わりあいには、二条東院の経営(F)、秋好の入内(G)、そして六条院の経営(H・I・J・K)のなかで目論まれていくことになる。青年光源氏の、特定の女君と近しく関わることを望む表現は、「――ばや」ばかりで「――しがな」は混じらず、また壮年光源氏の、女君への関心を滲ませつつも邸の経営等へと昇華していくような願望表現は、「――しがな」ばかりで「――ばや」は混じらない、という事実が指摘されるのである。

以上から、少なくとも『源氏物語』において「しが(な)」と「ばや」は使い分けられていた、と認めてよいであろう。では、「しが(な)」と「ばや」はどのように使い分けられていたのだろうか。

## 二 「しがな」と「ばや」の違い

『源氏物語』が書かれた時代には、「しが(な)」と「ばや」が並存していた。しかし上代に遡ると、「しが(な)」のほうは「てしか(も)」という形で存していたが、「ばや」という語ははまだ存在しなかった。「ばや」は平安時代初期に成立した語であり、その用例は、『古今集』には見られるものの、『竹取物語』・『伊勢物語』・『土佐日記』などにはなく、『うつほ物語』・『蜻蛉日記』以下の仮名文学において多く見られるようになっていくのである。

また藤原定家の時代には、「しが(な)」を使わなくなっていた。定家『僻案抄』は、古今集歌「おもふどち春の山辺にうちむれてそのこともいはぬ旅寝してしが」(春下・素性)に関して、「してしがな」といふ詞は、せばやと思ふ事を、してしがな、ありにしがなとはいふ也」と説明する。「てしが(な)」は古い時代の、意味のよく分からない語になっているのだが、それを定家は、「ばや」と同じ意味だと説明しているのである。

佐藤宣男氏は平安時代における「ばや」と「しが(な)」の使用状況を調べ、「時期が下るにともない、「ばや」が増加し、相対的に「しがな」が減少している」ことを指摘、「平安時代に新たに生じた「ばや」は、用法の上での共通性から次第に「しがな」を駆逐して、院政・鎌倉時代においては、「しがな」の座をほとんどとりつくりてしまう」と述べている<sup>(1)</sup>。

このように歴史的に大きく眺めれば、「しが(な)」から「ばや」

へと交代したのであり、両者は交代可能なよく似た言葉である、と言つてよいだろう。しかし繰り返し返すが、『源氏物語』の時代には両者が並存しており、何らかの使い分けがあったと考えられるのである。

\*

もしも定家の言うように「しが(な)」と「ばや」が同じ意味ならば、両語の違いは語感にあつたのかもしれない。「しが(な)」には古くからある語という重々しさが感じられ、他方「ばや」には比較的最近に使われた語という軽さが感じられたのかもしれない。佐藤氏は、平安時代の「女性・子供のことばにあつては、「しが(な)」よりも「ばや」の用いられる傾向がうかがえる」が、それは新興語としての語感が好まれたからであつて、「ばや」と「しが(な)」に「意味上の差異は、ほとんど認めがたい」とする。<sup>(2)</sup>

では、第一節で見たような「ばや」と「しが(な)」の使い分けを、語感の違いで説明できるだろうか。

願望の内容と願望表現の語感が対応している、という説明を試みてみよう。05～07のように願望者が意志的に対処すべき課題を表すときは、重々しい語感の「しが(な)」を用いるのがふさわしい、という説明は納得できるにしても、01～04のように心に取り憑いた願望を表すときは、軽い語感の新興語「ばや」を用いるのがふさわしい、という説明がはたして成り立つかどうか。また、F～Kのような女君への関心を滲ませつつも邸の経営等へと昇華していくような願望

表現には、「しが(な)」の重々しい語感がふさわしい、という説明には説得力があるかもしれないが、A～Eのような特定の女君と近く関わることを望む表現には、「ばや」の軽い語感がふさわしい、という説明はやや説得力に欠けているように思われる。というのも、藤壺の代わりに若紫を手元に置きたいと望むDやEなど、決して軽々しい内容の願望とは思えないからである。

A～Kについては、若い頃は新興語の「ばや」、壮年になると「しが(な)」のほうをより好むようになるためだ、という説明もありえよう。しかし、青年の源氏が「しが(な)」を使っている例<sup>(3)</sup>や、壮年の源氏が「ばや」を使っている例<sup>(4)</sup>が少なからずあることから、この説明もまた説得力を欠いているのである。

以上から、『源氏物語』における「しが(な)」と「ばや」の使い分けは、両語の語感の違いに基づくものではないように思われる。

\*

となると、「しが(な)」と「ばや」には何らかの意味の違いがあり、それに基づいて『源氏物語』は両語を使い分けている、ということになるだろう。それはいつたい、どのような違いなのか。

すでに述べたように、「ばや」は平安初期に成立した言葉である。その成り立ちについては、山田孝雄『平安朝文法史』<sup>(5)</sup>に、「未然形所屬の「ば」より「や」にゆきて「ばや」となり、下を略して希望をあらはすこと、この期よりあらはる。……こは「ば」にて下を略する形なる一種の慣例よりかくの如くなるに至りしなり」とあるの

が、通説となっている。ただし、「ばや」の「や」については、疑問の助詞とする説と、感動(詠嘆)の助詞とする説とがある。「ば」にて下を略する形」とは例え、

08 (源氏ハ夕顔ニツイテ) 心ばみたる方をすこし添へたらばと見たまひながら  
(源氏物語・夕顔①一五七頁)

のごときものである。これは次のような「ばや」の用例と似ている。

09 (覗キ見ル源氏ノ目ニ、軒端萩ハ) 心地ぞなほ静かなる気<sup>け</sup>を添へばやとふと見ゆる。  
(源氏物語・空蟬①一二〇頁)

10 (夕顔ト過ゴス源氏ハ六条御息所ニツイテ) あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまをすこし取り捨てばやと、思ひくらべられたまひける。  
(源氏物語・夕顔①一六三頁)

11 (大輔命婦ハ末摘花ノ琴ニツイテ) すこしけ近う、いまめきたるけをつけばやとぞ、乱れたる心には心もとなく思ひあたる。  
(源氏物語・末摘花①二八〇頁)

これらの「——ばや」は、「——」の実現を願い志す、といった願望ではなく、08と同様に、ただ、「——」したら良いのになあ、と想像しているだけの願望であろう。

次に掲げる用例も、同様である。

12 (兵部卿宮ハ源氏ニツイテ) 女にて見ばやと色めきたる御心に思ほす。  
(源氏物語・紅葉賀①三一九頁)

13 (紀伊守)「……兵部卿宮ぞいといみじくおはするや。女にて馴れ仕うまつらばやとなんおほえはべる」など、教へたらんやうに言ひつづく。  
(源氏物語・手習⑥三五九〜三六〇頁)

成立後まもない「ばや」の語義には、未然形接続の接続助詞「ば」+助詞「や」、という語の成り立ちが深く響いていたのではない。「ばや」は、「あくまで仮定的想像であ」り、「——」の実現まではとりあえず考えていない表現である、と推測されるのである。

次に、「しが(な)」について考えよう。まずはその前身、上代の「てしか(も)」について。山口佳紀氏は、「後世にはテシガと濁音に読まれるようになったが、古くはテシカと清音であった」こと、「上代では常に(動詞連用形+テシカ(毛))の形であった」ことを説き、したがって、「上接の動詞の性質に関わりなくテが現れるとすれば、このテは接続助詞のテと見る他はな」く、「テが接続助詞であるとすれば、それに後続する辞が助動詞であるはずはないから、シは副助詞のシ、カは係助詞のカと考えるのが、最も合理的であろう」とする。つまり、「くテまでは条件を表わし、シは強調、カ(毛)は詠嘆の意を添えるもの」と考えるのである。このような語構成は先に述べた「ばや」とも通ずるわけで、山口氏は、「平安時代に現れる(動詞未然形+バヤ)の願望表現形式についても」「ヤを感動(詠嘆)と見なすべきであろう」としている。

しかし平安時代以降になると、「(動詞連用形+テシカ(ナ))以外に、(動詞連用形+シカ(ナ)) (動詞連用形+ニシカ(ナ))の形が生じ」るが、これは、「テシカのテが完了ツの連用形のように意識され」るようになったため、「上接動詞の性質に応じてテが完了ツの連用形ニと交代してニシカの形が生じ」、また「シカが直接に動詞連用形に接続する」形も現れた、と山口氏は述べる。では

「しか」の語構成はどのように認識されていたのか、気になるところではあるが、確かな答えを出すのは困難であろう。そもそも平安時代には、「しか」と清んでいたのか、「しが」と濁っていたのか、それさえも定かではない。

そこで、平安時代の用例を見て考えていくことにする。山内洋一郎氏は「しが(な)」について、「いかで、このかくや姫を得て、しかな、見て、しかな」(竹取物語)の如く、「いかで」を上にもつ例が多い<sup>①</sup>ことを指摘、「いかで」は「何とかして。せひとも」という積極性を明瞭に示した陳述副詞であるから、「しが(な)」は「ばや」に比して「実現への積極性」がまさる、とする。例えば『源氏物語』について見ると、「いかで」と呼応するものは、「ばや」全八六例のうちわずかに二例約二%であるが、「しがな」の場合、全三七例のうち一四例約三八%とかなりの高率なのである。

第一節に掲げた用例01～07について考えてみよう。「願望者ハ——しがなと心にかく・心ヲつかふ」という形の用例05～07においては、「——しがな」は願望者が意志的に心をつかひ心にかけて対処すべき課題であった。言い換えれば、願望者は現実を見測りながら願望を実現すべく心を用いている、ということになる。他方、「——ばやと思ふ心ガ願望者ニ(オイテ)つきぬ・深くなりぬる・出で来ぬ」という形の用例01～04においては、「——ばやと思ふ心」が主語の位置に立っていて願望者は受動的であった。言い換えれば、「——ばやと思ふ心」は願望者のコントロール下におかれていない、願望者は現実を見測りながら願望を実現すべく心を用いるといった

ことをしていない、ということになる。このことは、「——ばや」についての、「——」の実現まではとりあえず考えていない表現、という推測に符合している。逆に「——しがな」については、「——」の実現を願い志す表現、と推測されるのではないか。

例えば用例05(ⅡF)「(源氏ハ五節ヲ)また見てしがなと心にかけたまへれど、いと難きことにて、え紛れたまはず。……心やすき殿造りしては、かやうの人集へても……と思す」(落標②二九九頁)や、用例06「(玉鬘ハ)実の親にさも知られたてまつりにしがなと人知れぬ心にかけたまへれど、さやうにも漏らしきこえたまはず」(胡蝶③一七五頁)では、傍線部の願望を実現するための方策が、波線部のところで探られている。用例05では、五節に会いに行こうと考えるがそれが困難であることから、次なる方策として、邸を造り五節らを手元に引き取ることを考えている。用例06では、本當の父親に自分の存在を知ってもらいたい、そのためには源氏が方を貸してくれるといいのだが、父親として世話をしてくれる源氏に向かつて、そんな意向を漏らすわけにもいかず、願望実現のための具体的方策を見つけられないでいる、とする。

あるいは、第一節で見た用例A～Kを思い出そう。「——ばや」の形の用例A～Eはいずれも心内語であり、「(藤壺ヲ)なづさひ見たてまつらばや」、「(空蟬ト軒端萩方)向かひぬらむを見ばや」、「(夕顔ノ家ノ女ニツイテ)知らばや」、「(若紫ヲ)明け暮れの慰めにも見ばや」、「(若紫ヲ)教へ生ほし立てて見ばや」と、いずれもまことに素直に、女君たちと近しく関わりあうことを望んでいる。

ここには、現実をあれこれと顧慮する重苦しさが見られないのである。他方「――しがな」の形の用例 F↪K は、F↪G が心内語、H↪K が会話である。心内語の F↪G は、「(五節ヲ) また見てしがな」(秋好ノ) 御容貌を見てしがな」と、やはり素直な願望ではあるが、殿造りや入内がからんでくるのは、現実には女君とどう関わりあつていくかを考えているからである。会話の H↪K はいずれも、六条院でこんなことをしたい、という願望表現で、女君たちに対する関心が昇華した形で現れている。

以上からやはり、「――ばや」は「あくまで仮定的想像である」のに対し、「――しがな」は「――」の実現を願ひ志す表現、と言えるのではなからうか。「しがな」と「ばや」の意味の違いを、願望実現への意志の有無に見るのである。この説を⑦とする。

## \*

⑦説は、本当に正しいのか。さらなる検討のために、願望の内容が似ているのに、片や「――ばや」、片や「――しがな」で表現されているケースを、『源氏物語』から二組取り上げることしよう。

14対の上(≡紫ノ上)、かく年月にそへて方々にまさりたまふ(女三ノ宮ノ) 御おほえに、わが身はただ一ところの御もてなしに人には劣らねど、あまり年つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん、さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがな、とたゆみなく思しわたれど、さかしきやうにや思さむとつづまれて、はかばかしくもえ聞こえたまはず。

(若菜下④一七七頁)

15 (出産後ノ女三ノ) 宮は、さばかりひはづなる御さまにて、いとむくつけう、ならはぬことの恐ろしう思されけるに、御湯なども聞こしめさず、身の心憂きことをかかるとつけても思し入れば、さはれ、このついでにも死なばやと思す。大殿は、いとよう人目を飾り思せど、まだむつかしげにおはするなどを、とりわきても見たてまつりたまはずなどあれば……さのみこそは思し隔つることもまさらめと恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。(柏木④三〇〇〜三〇二頁)

14の紫の上の「背きにしがな」も、15の女三の宮の「尼にもなりなばや」も、ともに出家したいという願望である。紫の上の場合は、自分の立場等を考慮したすえに出家という結論へと到っており、論理的意志的である。出家の願ひを実現するためには、夫である光源氏の許可が欠かせないのだが、波線部は、紫の上が常に出家の実現を志し、源氏に願ひ出ようと思ひながらも、容易に言い出せないでいることを語る。ここには、願望実現を志しながらも、その困難に直面している紫の上の姿がある。

他方の、女三の宮の出家願望、および直前の「死なばや」という願望は、「いとむくつけう」・「恐ろしう」・「心憂き」・「恨めしう」・「つらく」といった形容詞の連発のすえに現れており、きわめて感情的である。「死なばや」が、いつのまにか「尼にもなりなばや」へとすり替わつてしまふところも、これらの願望が感情にまかせた思いつきであることを窺わせる。特に「尼にもなりなばやの御心」

については「つきぬ」という述部で承けられているが、女三の宮出家後に六条御息所の物の怪が現れ、「かうぞあるよ」云々と語ることから（柏木④三一〇頁）、物の怪が女三の宮に「つ」かしめたものであったと考えられる。ここには、願望を実現しようとし、そのための方途を落ち着いて検討する、といった姿勢は微塵も見られないのである。以上のような、14と15における「しがな」と「ばや」の使い分けは、⑦説を支持するものであろう。

もう一組は和歌である。

16（花散里）月影のやどれる袖はせばくともめても見ばやあかぬ光を  
（須磨②一七五頁）

ぬ光を

（須磨②一八六頁）

これらとともに、須磨へ退居する源氏との別れに際して詠まれており、源氏をここにとどめたい、とする点も共通する。この使い分けについても、⑦説を用いて、次のように説明できるだろう。

花散里の歌は、月影（＝源氏）を私の袖にとどめて見たい、というロマンチックな内容である。経済的には源氏に頼って暮らしているものの、源氏の訪れは須磨への退居がなくともごく稀な花散里であってみれば、自分のもとに源氏をとどめることの実現を望むとしたら、分不相応との譏りを免れまい。自分の分を弁えている花散里は、胸のうちに本当は願ってやまない源氏との飽くほどの関わりを、「とめても見ばや飽かぬ光を」という、ことさら空想的な表現であらわしている。

他方、正妻格の紫の上に、そのような遠慮は要らない。「目の前の別れをしばしとどめ」たい、とは単に空想しているのではなく、その実現を切望しているにちがいない。「惜しからぬ命にかへて」と、願望実現の代償まで自ら提案しているのである。このような願望には、「ばや」でなく「しがな」がふさわしい。

ただし16・17は歌であるから、似たような表現「ばや」と「しがな」のうち、字数の合うほうを選んだのだ、と説明することも可能ではあろう。しかし、それならば16歌第四句を「とどめてしがな」などと表現してもよかつたのではないか、なぜそうせずに「ばや」を用いたのか、という疑問は残ってしまうのである。

以上の検討から、⑦説を認めてもよいのではないだろうか。

### 三 「もが（な）」について

平安時代の願望の終助詞「もが（な）」<sup>10</sup>は、「ばや」・「しが（な）」と異なって種々の語につき、また「しが（な）」と同様、上代から「もが（も）」という形で存していた古い語である。この「——もが（な）」の意味を考えていきたい。すなわち、「——ばや」と同じく「——」を望ましいこととして想像する表現なのか、それとも「——しが（な）」と同じく「——」の実現を願い志す表現なのか、あるいは別種の願望表現なのか、を考えたいのである。

ここでしばらく千田幸夫氏の論を見ることにしよう。<sup>11</sup>氏は、上代の「もが」と「てしか」には、「明確な承接上の対立」があり、この対立に由来するところの「意義的対立」がある、とする。「承接



上の対立」から確認しておく、「もが」は「形容詞、副詞、あるいは体言、もしくは体言を状态的に陳述する「体言+」、更には助詞「て」によって状態化された動詞」をうけ、すなわち「すべての動詞に直接には絶対につか」ないのに対し、「てしか」は「必ず動詞にのみつく」のである。この対立に由来する「意義的対立」とは、「もが」の様式において示される願ひが、動詞的な世界と全く無縁なもの」であり、「何らかの固体的対象を求め、あるいは対象化された状態を欲する」ものであるのに対し、「てしか」は、「動詞的世界に根ざ」すものであり、「行為的願望」である、ということである。しかし、

18 男も女も、いかでとく京へもがな、と思ふ心あれば

(土佐日記・一月十一日)

19 人離れたらむ御住まひにもがな、と思しなれど

(源氏物語・鈴虫④三八一頁)

のように「格助詞+もが(な)」の用例が現われ、あるいは、

20 我がやどの尾花が上の白露を消たずて玉に貫くものにもが

(万葉集・巻八・大伴家持)

21 いかでつぶつぶと言ひ知らするものにもがなと思ひ乱るとき

(蜻蛉日記・上巻)

22 かかる道をも見せたてまつるものにもがな

(源氏物語・玉鬘③八九頁)

23 あらざらんこの世のほかの思ひ出でにいまひとたびの逢ふこと

もがな  
(後拾遺集・恋三・和泉式部)

のごとき、「形式名詞(+に)+もが(な)」の様式が成立するとともに、「もが」は「動詞の世界」へ近づいてゆく。平安時代になると、「もが(も)」は「もが(な)」へと形を変え、他方の「てしか(も)」は「か」が濁音化し、また、自動詞的なものをうける「にし(な)」を派生、これは「て・に」は助動詞「つ・ぬ」であると思われ、意識されていることを意味するから、すなわち「てしか(も)」は「しが(な)」へと形を変える。つまり両者は、意味のうえだけでなく、形のうえでも近づき、その結果、両者の「がな」は「まぎれてしまふ」ことになる、と氏は述べている。

平安時代になると「てしか(も)」の「か」は濁音化した、という点など確認できないのであるが、もしも千田氏の言うとおりであるならば、「もがな」と「しがな」は、「がな」の直上を異にするからには勿論相違点もあるけれど、とにかく同類の願望表現と意識されるようになったのではないか。以下に掲げる『源氏物語』の用例などを見ると、「——もが(な)」は、「——しが(な)」と同じく「——」の実現を願ひ志す表現であり、「仮定的想像」の「——ばや」とは異なる、と考えてよいように思われるのである。

24 この女のあるやう、**①**もとより思ひいたらざりけることにも、  
いかでこの人のためにはと、なき手を出だし、**②**後れたる筋の心をもなほ口惜しくは見えじと思ひ励みつ、**③**とにかくにつけてものまめやかに後見、つゆにても心に違ふことはなくもがなと思へりしほどに  
(帯木①七二頁)

これは雨夜の品定めの一節、「この女」(＝指喰いの女)が「この

人」(＝左馬頭)の意に添わんと念じながらその世話に励む様子を語っている箇所である。①「もとより思ひいたらざりけることにも、いかでこの人のためにはと、なき手を出だし」と、②「後れたる筋の心をもなほ口惜しくは見えじと思ひ、励み」とは、二重傍線部どうし・波線部(＝心内語)どうし・破線部どうしの内容が対応していること、二重傍線部+波線部+破線部という構成を同じくすること、などを見てあきらかなように、並列関係にある。もともと守備範囲外だったことも①、苦手なことも②、という並列は、得意なこととは勿論、と言外に語つていようが、これらを「つつ」で受けとめて、③「とにかくに……思へりしほどに」というまとめへと流れ込んでいく、そういう文の組み立てであろう。この③「とにかくにつけても」のまめやかに後見、つゆにても心に違ふことはなくもが、など思へりしほどに」も、二重傍線部・波線部・破線部から成り、①②と似た構成を持つている。①②③を見比べると、守備範囲外のことも①、苦手なことも②、とにかくあれこれにつけて③、と畳みかけてくる二重傍線部に対し、波線部・破線部は①②③いずれにおいても、あくまでも「この人」の意に添おう、と思ひ、頑張つて世話をする、という内容で一貫しているようである。波線部に注目すると、「いかでこの人のためには」①・「なほ口惜しくは見えじ」②と、どちらも意志的な表現(傍点部)を含むが、ならば、「つゆにても心に違ふことはなくもがな」③にも、「心に違ふことはなく」を実現しようという意志が、読みとられてよいのではないか。

『源氏物語』から、もう二例を見ておこう。

25 (明石ノ入道)「聞くゆべきことなむ。あからさまに対面もがな」(須磨②二〇九頁)

26 (女三ノ宮ハ)人離れたらむ御住まひにもがなと思しなれど、およすけてえさ、も強ひ申したまはず。(鈴虫④三八一頁)

25は、明石の入道が良清に言い送つてきたことば。申し上げることがあると言う、その次にくるのは、対面の実現を望む表現であるのが自然であろう。26の女三の宮の心内語「人離れたらむ御住まひにもがな」は、「さ」で受けられているが、「さ」の前後の表現から、「およすけて」(＝大人びて)言うような内容、「(源氏ニ)強ひ申す」(＝無理にお願い申し上げる)ような内容であることが分かる。源氏は女三の宮が三条宮へ移ることに反対している(鈴虫④三七八～三七九頁など)ことを考えあわせるなら、「人離れたらむ御住まひにもがな」とは、「人離れたらむ御住まひに」移り住むことの実現を望む表現であると考えられよう。

このように、「もが(な)」は「――」の実現を願ひ志す表現である、と考えられるのであるが、しかし、「もが(な)」に実現不可能なことを願う用例が多いことは、やや奇妙にも感じられる。特に和歌に多く見られるそうした用例を、いくつか検討してみよう。

27世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと歎く人の子のため(古今集・雑上・在原業平／伊勢物語八十四段では第四句「千代もといのる」)

28 (桐壺帝)たづねゆくまほろしもがなつてにても魂たまのありかを

そこ事知るべく

(源氏物語・桐壺①三五頁)

27は世の中に死別がないことを望み、28は死者の魂を捜しにゆく幻術士がいることを願う。どちらも実現不可能な願いであるが、「もがな」を用い、その実現を願うことによってこそ、その実現不可能性——死別は避けがたく訪れ、死者の魂はたずねようがないこと——を痛切に思い知らされ、噛みしめることになるのではないか。

29 大空におほふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ

(後撰集・春中・よみ人しらず)

30 思ふてふ人の心の隈くまことに立ち隠れつつ見るよしもがな

(古今集・誹諧歌・よみ人しらず)

29は、「春咲く花を風にまかせ」ないための「大空におほふばかりの袖」という、何ともスケールの大きな、しかし到底実現不可能な思いつきをうたう。だが「……袖もがな……まかせじ」と実現願望・打消意志の表現を用いる、毅然たるうたいぶりから、うたっている本人は実現不可能と思わず、これはいいことを思いついたと信じているようにも見える。そこに微笑ましさの感じられる歌である。ただしその微笑ましさは、花を風に散らさぬことなど不可能なのだ、という哀しみを底に隠してもいよう。30は、「思ふてふ人の心」を隈なく見あらわしたいという切実な願望を表明する歌ではあるが、『古今集』では「誹諧歌」に分類される。その所以は、「人の心の隈」ことに立ち隠れつつ見たいという願望のユニークさのみ存するのではあるまい。その願望を「もがな」を用いて表し、突飛で超現実的な願望の実現を真剣に願ってみせるところにも、「誹諧歌」の

面目は躍如していよう。

要するに、実現不可能なことの實現を願う表現は、そこに滲み出る哀切さや微笑ましさ・可笑しさゆえに、和歌の世界などで好まれてきたのではないだろうか。

以上から⑦説を拡大して、「がな(＝しがな・もがな)」と「ばや」の相違点は、願望實現に対する意志の有無である、と改めることにしたい。

#### 四 光源氏について

以下、ようやく本題に入る。拡大⑦説に基づいて『源氏物語』の「ばや」・「がな」の用例を検討し、光源氏の人物像について考えていきたいのである。ここではまずは、第一節に掲げ、第二節でも検討した用例A～Kを、再度眺めることにしよう。

用例A～Eにおいて光源氏は、みずからの望ましき行為・ありようを、それを実現するための現実的諸条件など考慮することなしに、とりあえずはつきりと思ひ描いている。しかし、ただ思い描くだけかという点、そうではない。その思い描かれた願望は、彼の行動を呼び起こすのである。Aは源氏元服前のことであるが、「藤壺ヲなづさひ見たてまつらばや」という願望は、「はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる」(①四四頁)という行動へと直ちに結びついていく。Bは空蟬と軒端萩が基を打っている様子を見ること、Cは夕顔の咲く家に住む謎の女を知ること、をそれぞれ望ましく思い描くものであるが、Bは、「やをら歩み出でて簾のはさま

に入りたまひぬ。この入りつる格子はまだ鎖さねば、隙見ゆるに寄りて西ざまに見通したまへば……いとよく見入れらる」(①一一九頁)と、即座に行動に移されて願望は実現することになるし、またCについては、源氏が「なほ言ひよれ」(①一四四頁)と命じて、惟光が引き続き偵察、その報告を聞いた源氏の「かいま見せさせよ」(①一五一頁)との意向を承けて、惟光は「いみじくたばかりまどひ歩きつつ、しひておはしまさせそめてけり」(①一五一頁)、という運びとなる。あるいはD・Eにおいては、北山の少女を、藤壺の代わりに明け暮れ見ること・理想的な女性へと教養育て上げること、が夢見られているが、この夢も、少女を引き取るべく僧都・尼君らに熱心に働きかける、という源氏の行動を呼び起こし、ついには実現していくことになる。

つまり、「若紫」巻までの光源氏は、女君と近しく関わることを望ましく思い描き、その望ましきイメージに促されるように、何らかの行動をとって女君のもとに至る、というパターンを繰り返しながら、藤壺・空蟬・夕顔・若紫といった女君たちと関わっている。

このような光源氏のあり方の異様さは、柏木と比較することで見えてくるかと思う。そこで、やや長い寄り道をすることにしたい。

柏木の思考を見てゆくと、女三の宮を得たいという叶いたい願望を、実現可能な願望へとすり替えることが、しばしば行われていることに気づく。なお、①⑤の波線部は柏木が自身の願望をことばにしたものの、傍線部はその願望達成の手段・機会を模索することばである。

①(源氏)「……」など戯れたまふ御さまの、にほひやかにきよらなるを見たてまつるにも、かかる人に並びて、いかばかりのことにか心を移す人はものしたまはむ、何ごとにつけてか、あはれと見ゆるしたまふばかりはなびかきこゆべき、と思ひめぐらすに、いとどこよなく御あたりはなるかなるべき身のほども思ひ知らるれば、胸のみふたがりてまかたたまひぬ。

(若菜上④一四四―一四五頁)

これは六条院の蹴鞠の日、柏木が女三の宮をかいま見た後のことである。源氏の「にほひやかにきよらなる」さまを見た柏木は、女三の宮はこの人を夫としているのだと意識し、「かかる人に並びて……ものしたまはむ」と考える。そうした思考の磁場のなかで、願望はことばにされる(アの波線部)。女三の宮をいささかでもなびかすことができようか、とずいぶん控えめな願いであるが、それさえも難しいと思ひ知らされる柏木である。

②(若)の君(＝柏木)は……この夕(ゆふ)に(＝女三ノ宮ヲ垣間見タタ方)より屈しいたく、もの思はしくて、いかならむをりに、またさばかりにてもほのかなる御ありさまをだに見む、ともかくもかき紛れたる際の人こそ、かりそめにも、たはやすき物忌方違への移るひも軽々しきに、おのづから、ともかくももの隙をうかがひつくるやうもあれ、など思ひやる方なく、深き窓の内に、何ばかりのことにつけてか、かく深き心ありけりとだに知らせたてまつるべきと胸いたくいぶせければ、小侍従がり例の文やりたまふ。

(若菜上④一四七―一四八頁)

②では、イ、ウと近接して二箇所、波線部と傍線部の対があらわれる。イは、蹴鞠の日の垣間見くらいでいいから宮の姿を見たい、という願望であるが、この願望実現の方法を求めて、「ともかくもかき紛れたる際の人こそ……うかがひつくるやうもあれ」と考えめぐらしてみれば、方法は見つかりそうにもない。すると今度は、ウがあらわれる。ウは、自分の恋情を女三の宮に知らせたい、という願い。実現の方法が見つかるような願望へと、ずらしているのである。ウの願望については、「小侍従がり例の文や(三〇)」という方法に望みを託し、即座に実行している。しかし、小侍従からの返事には、「いまさらに色にな出でそ山桜およばぬ枝に心かけきと／かひなきことを」(若菜上④一四九―一五〇頁)とあった。これを見た柏木の心内が③である。

③ことわりとは思へども、うれたくも言へるかな、いでや、なぞ、かくことなることなきあへしらひばかりを慰めにてはいかが過ぐさむ、<sup>エ</sup>かかると思ふにつけて、おほかたにては惜しくめでたしありなんや、と思ふにつけて、おほかたにては惜しくめでたしと思ひきこゆる院の御ため、なまゆがむ心や添ひにたらしむ。

(若菜下④一五三頁)

「およばぬ枝に心かけき」を「ことわり」とは思うものの、「いでや」と柏木は反発し、「なまゆがむ心」を抱くようになる。願望エも、他の願望と同様、現実配慮する心が思い描くものだが、同時に現実配慮する気持ちいささか含んでいよう。

④みづからも、大殿を見たてまつるに気恐ろしくまばゆく、かか

る心はあるべきものか、なのめならんにてだに、けしからず人に点つかるべきふるまひはせじと思ふものを、ましておほけなきこと、と思ひわびては、<sup>オ</sup>かのありし猫をだに得てしがな、思ふこと語らふべくはあらねど、かたはらさびしき慰めにもなつけむ、と思ふに、もの狂ほしく、いかでかは盗み出でむと、それさへぞ難きことなりける。

(若菜下④一五五頁)

④は、①の蹴鞠と同じ月のうちに同じく六条院で競射が行われた日のこと。「なまゆがむ心」を抱く柏木は、源氏を見て「気恐ろしくまばゆく」感じる。その全身的な感覚を受けて、「かかると思ふべきものか……」と考え、願望エが「おほけなきこと」であると認識する。そこでまた、願望は変更される。かいま見のきつかけをつくってくれたあの猫をせめて手に入れてなつきたい。この願望オは実現し、その後六年間柏木は物語から姿を消す。

⑤まことに、わが心にもいとけしからぬことなれば、け近く、なかなか思ひ乱ることもまさるべきことまでは思ひもよらず、ただ、<sup>カ</sup>いとほのかに、御衣のつまばかりを見たてまつりし春の夕の飽かず世とともに思ひ出でられたまふ御ありさまをすこしけ近くて見たてまつり、思ふことを聞こえ知らせては、一行の御返りなどもや見せたまふ、あはれとや思し知るとぞ思ひける。

(若菜下④二二二―二二三頁)

これは、①―④の六年後、女三の宮に逢う直前である。六年の間に願望はまた変化している。カはア／エのすべてを望んでいるような願望である。⑤の直前を見ると、柏木は、二重波線部とよく似たこ

とを小侍従に話している。「おほけなき心は、すべて、よし見たまへ、いと恐ろしければ、思ひ離れてはべり」(若菜下④二二〇頁)、「数にもあらずあやしきなれ姿を、うちとけて御覧せられむとは、さらに思ひかけぬことなり」(若菜下④二二二頁)。つまり、密通など考えていない、と柏木は小侍従にも自らにも繰り返し言明するのだが、しかしこれは、つい思い浮かんできてしまう密通を何度も打ち消している、ということではないか。

以上見てきたように、柏木はつねに現実を顧慮して実現可能な願望を抱くようにしている。「女三の宮を得ばや」といった願望が心の底にあることを彼は決して認めようとせず、現実を顧慮したうえで本当の願望に変形を加え、「猫をだに得てしがな」といった、現実との摩擦が少ない願望を抱くようにしているのである。

これに比較するとき、光源氏の特異性が見えてくるのではないか。「ばや」は、実現を願う「しがな」と異なり、「あくまで仮定的想像である」とすると、「なづさひ見たてまつらばや」(A)、「向かひゐたらむを見ばや」(B)、「知らばや」(C)、「明け暮れの慰めにも見ばや」(D)、「心のままに教へ生はし立てて見ばや」(E)と願う青年光源氏は、現実を顧慮しておらず、つまり実現可能性に依じて願望を変形したりしていないことになる。現実への配慮による変形がなされていない、生のままの願望をまず素直に心に浮かべ、そしてその願望に導かれ、何らかの行動をとって女君のもとに至る——このあまりに純粹で大胆な光源氏のありように、我々は驚くべきではないか。

じつは、「若紫」巻までの青年光源氏も、「がな」を二度用いている。

L(乳母二)「……なほ久しう対面せぬ時は心細くおぼゆるを、さらぬ別れはななくもがなとなん」などこまやかに語らひたまひて  
(夕顔①一三九頁)

M見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身とも  
がな  
(若紫①二二二頁)

Lは、病重い乳母に語りかけていることばで、業平歌「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと歎く人の子のため」(27として既出)を引いている。Mは、藤壺との密通場面における、源氏の贈歌である。ここには、やさしい姉のような藤壺に甘える口ぶりが認められよう。しかし、「がな」ということばを選びとっているところに、甘えるだけではない源氏の姿を見ることができないのではないか。「——がな」は「——」の実現を願い志す表現であるが、「夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな」とは実現不可能な願望である。「がな」を用いることで、「夢の中にやがてまぎるるわが身」ではありえない現実が意識されてしまうのである。こうした痛切な現実認識をもつことで、源氏は、藤壺に甘えるばかりで身を滅ぼしかねない、その破滅のぎりぎり直前で踏み止まっているように思われる。ここで再び、柏木に登場願おう。柏木は、女三の宮に惹かれていく過程で、「がな」と「ばや」を一度ずつ用いている。

④かのありし猫をだに得てしがな、思ふこと語らふべくはあらねど、かたはらさびしき慰めにもなつてむ、と思ふに

(若菜下④一五五頁)

⑥さかしく思ひしづむる心も失せて、(女三ノ宮ウ) いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばやとまで思ひ乱れぬ。(若菜下④二二六頁)

柏木の場合、源氏とは逆で、恋の始まり④では「がな」を、密通の場面⑥では「ばや」を、それぞれ用いているのである。

柏木は、心の奥深くに抱き持つ願望を、現実との軋轢を避けるべく調整・変形していく。しかし彼は、女三の宮を前にして、今まで持ち続けてきた「さかしく思ひしづむる心」を失い、「いづちもいづちも……跡絶えてや」む願望を、「がな」ではなく「ばや」で表してしまふ。この最も危険な場面に来たつて、現実認識を放棄してしまつた柏木は、身を滅ぼしていくほかない。

このような柏木と比較するとき、青年光源氏の恋が現実の束縛を受けずに、いかにも大胆にまっすぐ進んでいくこと、しかし本当に危険なところに来ると、現実とのあいだを結ぶ命綱を手繰り寄せ、ざりざり崖つぶちで踏みとどまっていること、が見えてくるだろう。須磨・明石からの帰京を果たし、壮年期に達した源氏は、「——がな」という形の願望を多用するようになる。F～Kのように、なおも女君たちに関心をもち関わりあつていくことを望みつつも、その願いを、現実を顧慮しながら邸の経営などへと昇華させていくのだ。彼は若い頃から、「——ばや」という願望を発端として女君たちと関わりあい、彼女たちとのあいだにそれぞれ固有の世界を築いてきたわけだが、それらをそのまま大切にしながら、現実世界のた

だなかに六条院などの形で位置づけていこうとするのである。同じく「——がな」という願望表現を用いていても、柏木の場合は、願望をはじめから否定し抑え込み、現実世界と摩擦を起こさぬ矮小化無害化した願望で自他を納得させようとしていたのだが、それとは全く異なるのである。

\*

光源氏の晩年には、次のような「がな」の用例が見られる。

N (源氏、女三ノ宮ニ)「墨染こそ、なほ、いとうたて目もくるる色なりけれ。……取り返すものにもがなや」と、うち嘆きたまひて (柏木④三二一～三二二頁)

O (源氏) ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがな

とて、御涙を払ひあへたまはず。……聞こえかはしたまふ(紫ノ上ト明石ノ中宮ノ)御容貌どもあらまほしく、見るかひあるにつけても、かくて千年を過ぐすわざもがなと思さるれど、心かなはぬことなれば、かけとめん方なきぞ悲しかりける。

(御法④五〇五頁)

Nは、「取り返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はむ」(源氏積など。出典未詳)を引く。「取り返す」ということは、過去へと流れていつてしまった時間、隔たつた彼方にある昔の時間を、今ここに取り戻す、取り戻してやり直す、といった意味で用いられている。「取り返すものにもがなや」は、その不可能

性を痛哭する表現である。〇の二カ所の「——がな」もまた、時間とともに流れゆき、やがて一人ずつ消えてゆくほかない人間である、という現実認識と、しかしその現実に抗いたい心情とを言い込めている。

これらに類する「——がな」を、源氏は早く「夕顔」巻で用いている。すでに見た用例Ⅰである。「……なほ久しう対面せぬ時は心細くおほゆるを、さらぬ別れはなくもがなとなん」(Ⅰ)など、重病の乳母に向かって懇ろに語りかけた源氏は、「修法など、またまたはじむべきことなどおきてのたまはせて、出でたまふとて、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覧すれば」(夕顔①一三九頁)と、病室から退くや即座に夕顔の家の女へと関心をうつしていく。乳母へのごときは口先だけの真情を伴わないものであったのか、とも思われるがしかし、無常感から恋心へ、というスライドは、青年光源氏にしれば見られるものである。若い頃から折々無常を感じ出家を考へることもあった源氏は、その度ごとに湧き起こる執着の心にとらえられ、無常・出家への思いを有耶無耶にしてきたのであった。しかし晩年の源氏は、いよいよ逃れがたく、無常の現実を正面から見つめることになるのである。

青年期の光源氏は、心に宿った願望をそのまま「——ばや」という形で抱き持ち、行動へと移してきた。そうした恋がもたらす危険を、彼は、ここぞというときには現実認識を取り戻し現実世界へと舞い戻ることによって、辛うじてかわしてきたのである。折々無常を感じることもある源氏であったが、現実世界が無常であることに

向かい合うこと、それはすなわち、舞い戻るべき現実世界をはかないものと見ることであり、恋の深みへ下りていくときの命綱を失うことにつながってしまう。青年期の源氏は、無常と向き合ってはならないのである。

しかし、壮年期の源氏は「——がな」という願望表現、すなわち「——」の実現を願ひ志す表現を多用するようになる。源氏の願望はいまや、彼を現実世界に引き留めるものへと転じたことになる。ここに、いままで彼が正面から向き合うことのできなかった、現実世界の無常という問題が、浮上してくるのである。

青年光源氏の願望は、彼を現実世界から遊離する方向へと導いていく。そんな願望を、矮小化せずにそのままに抱え持ち、壮年期に至って、六条院の経営という形に昇華し栄華を手にした光源氏は、晩年を迎え、いまや源氏を現実世界に引き留めるものとなった願望を抱えつづけながら、流れ去る時間、死すべき人間という如何ともしがたい現実に向き合うこととなったのである。その状況は、光源氏に固有の、酷烈なものであったと思われるのである。

注1 佐藤宣男「がな」と「ばや」『文芸研究』69集、一九七二年三月。

2 注1論文。

3 「いかで、ことごとしきおほえはなく、いとらうたげならむ人のつつましきことなからむ、見つけてしがな」(未摘花①二六五頁)、「いぶせうはべることをもあきらめはべりにしがな」(賢木②八六頁)。

4 「明石ノ君ニいささかなる消息をだにして心慰めばや」(潘標②三〇六頁)、「藤壺ノ」罪にもかかりきこえばや」(朝顔②四九六頁)、「いま



一ところの料を、これより奉らばや」(少女③六九六頁)、「(梅ヲ)花の盛りに並べて見ばや」(若菜上④七二頁)、「御手のいと若きを、しばし見せたてまつらであらばや」(若菜上④七二頁)。

5 山田孝雄『平安朝文法史』寶文館、一九一三年。

6 森田良行「終助詞 なくそ・な(禁止)・ばや・なむ・な・ね・に・が・がな・がも(希望)」『国文学解釈と鑑賞』一九七〇年一月。

7 山口佳紀「テシカ・モガ成立考」『万葉集研究』第10集、塙書房、一九八一年。

8 武田祐吉「しか」「てしか」考(「国語と国文学」一九三一年七月)は上代の用字例を検討して、「てしか」は清音、「もが」は濁音であったとした。しかし、平安時代の「しが」の清濁は定かでない。本稿では、とりあえず濁音で表記する。

9 山内洋一郎「終助詞 古典語」が・ばや」『国文学』一九六七年一月臨時増刊。

10 「をがな」という形もあるが、「もが(な)」に準じて考えることができよう。

11 千田幸夫「もが・てしか」考(一)〜(三)」『鹿児島大学文科報告』第8〜10号、一九五九〜一九六一年。

12 鈴木日出男「はじめての源氏物語」(講談社現代新書、一九九一年)など。

\*本文の引用は、『源氏物語』『万葉集』『古今集』『土佐日記』『蜻蛉日記』は『新編日本古典文学全集』(小学館)、『後撰集』『後拾遺集』は『新日本古典文学大系』(岩波書店)、『源氏釈』は『源氏物語古注集成』(おうふう)、『僻案抄』は『群書類従』に拠った。ただし表記を私に改めたところがある。

(きたに・まりこ 本学准教授)